

ヒヨクコムギ栽培特性調査試験

田崎正人・村上雅二・猪山純一郎
(大分県農業技術センター)

TASAKI, M., MURAKAMI, M., and IYAMA, J.
The Characters of Wheat Plant "Hiyukomugi"

昭和43年12月に大分県の小麦奨励品種に決定したヒヨクコムギについて、栽培特性を明らかにし、普及指導を適確に行なう資料をうるため、昭和42年度においてこの試験を実施した。この試験の実施にあたり、農業技術研究所の塩見正衛技官の指導を仰いだのでここに深甚の謝意を表する。

1. 試験方法

試験は、農林61号を対象品種とし品種を2水準、肥料条件を標肥 (N : 0.75^{kg/a}, P₂O₅ : 0.56^{kg/a}, K₂O : 0.75^{kg/a})、多肥 (50%増)、倍量の3水準とし、栽培様式は慣行、ドリル播 (25cm条播)、全層播の3水準、播種量は栽培様式によって異なるが、標準播 (慣行 0.4^{kg/a}, ドリル播 0.6^{kg/a}, 全層播 0.8^{kg/a})、多量播 (50%増)、倍量播の3水準で、L₂₇ 直交表による多因子計画で実施した。全区数 54, 1 区面積 16 m² で播種は12月2日に行なった。

2. 試験結果と考察

第 1 表 収穫物調査 (全区の平均値)

品 種	成熟期 (月日)	倒伏 ビ	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/㎡)	稈重 (kg/a)	精麦重 (kg/a)	千粒重 (g)
ヒヨクコムギ N 61	6.9 6.12	ビ ビ-少	82.6 89.9	9.7 9.3	561 591	42.2 45.1	57.0 53.6	36.7 34.7

出穂期は、ヒヨクコムギが農林61号より4~6日・成熟期は2~5日早い。

収量の平均は、ヒヨクコムギ57^{kg/a} (最高 67.6^{kg/a}, 最低 42.7^{kg/a})、農林61号 53.6^{kg/a} (最高 67^{kg/a}, 最低 38.7^{kg/a}) であった。全27区のうちヒヨクコムギが減収した区は5区で他の22区は農林61号より多収であった。分散分析の結果、収量は品種間のみ有意性が認められ、あきらかにヒヨクコムギが優った。

稈長は、栽培様式間に1%の有意性が認められ、esd 1.85cmで全層播・ドリル播・慣行の順に長い。品種間では1%の高い有意性で農林61号が長かった。

穂数は、栽培様式・播種量・品種間に有意性が認

められた。栽培様式では全層播・ドリル播と、慣行の間に高い有意差があり、土地利用率の高い栽培様式が、穂数確保には有効であった。ドリル播と全層播の間に差はない。播種量では倍量播が標準播より穂数が多く、多量播と倍量播・多量播と標準播の間には有意差がない。品種では農林61号が多かった。

稈重は栽培様式・播種量・品種にそれぞれ5%の有意性が認められた。栽培様式では全層播とドリル播間に差がなく、この二つと慣行の間に有意差が認められた。播種量では倍量播が標準播より稈重が大であったが、多量播と倍量播・多量播と標準播の間に有意差は認められなかった。品種では農林61号が重かった。

千粒重は、施肥量と品種間に有意性が認められた。施肥量では、標肥が多量・倍量より千粒重が重く施肥量を多くすることによって軽くなった。極端なNの増施は、外観上の品質も著しく低下させた。品種ではヒヨクコムギが重い。

ヒヨクコムギの収量は、穂数m²あたり約500本までは直線的に増加するが、それ以上ではばらつきがひどい (r = 0.637)。農林61号は穂数が増加するほど収量が増加した (r = 0.876)。

また 収量 / 稈重 率はヒヨクコムギ135.1%・農林61号118.9%で、ヒヨクコムギの比率が高かった。

3. 総 括

以上の結果から、ヒヨクコムギの特性として、農林61号より短稈・早熟・大粒・大穂で多収である。また乾物の稈・子実配分の効率が良い品種といえる。栽培上からヒヨクコムギの能力を最大に発揮させるには、土地の利用率を高くし肥料・播種量を増して穂数をm²当り500本位確保するようにする。極端な多肥は品質の低下をまねくので注意を要する。